

月曜日の早暁。ハフアル・アル・バテン空軍基地の誘導灯は終夜煌々と滑走路を照らし、格納庫もオフィスも兵士が慌ただしく動き回っている。司令官のトルキ王子はまんじりともしない一夜を過ごしたが、高ぶった気持ちに頭は冴えわたっていた。基地のモスクのミナレット（尖塔）から夜明けの祈りを促すアザーンの声が流れる。いつもはモスクの中で礼拝するのだが、今日は兵舎の外の砂漠に体一つ分の絨毯を敷き南のメッカの方向に向かって祈りを捧げた。清冽な空気が辺りを支配し、東の空が白み地平線に太陽が顔をのぞかせた。何百年も前から砂漠の民ベドウィンが目にしてきた神々しい風景だ。コーランの一節を唱え、何度か膝を屈して地上にひれ伏した。アラールへの感謝の気持ち体が中にみなぎる。

祈りを終えると王子は軍服についた砂を払い落とし、メッカとは反対の北の空を仰いだ。そろそろイスラエルの戦闘機が通過する時刻だ。彼らがこの辺りを通過するときはこの基地を避けてイラク深くを飛行すると聞かされていた。だから機影を見ることが無理かもしれない。しかしジェット音は見逃さない。過酷な砂漠に生きるベドウィンは遙か遠く砂丘の稜線に動く人影、或いは遙か遠くで砂丘を踏みしめるラクダの足音を感知する目と耳を持っている。

第7章

今や王族の大半は都会暮らしであるが、それでも砂漠に戻ればベドウィンの視力と

第7章

聴力は他の追隨を許さない。それは王子が飼っている鷹と同じ程の能力なのである。と言うよりベドウィンを「砂漠の鷹」と呼んだ方が相応しいのかもしれない。

王子の耳に遠くで唸るような音が聞こえた。普通の人間なら幻聴と片付けるほどのかすかな爆音であるが、彼はジェット戦闘機の音だと確信した。傍にいた部下たちも聞き逃さなかった。その時間帯はベイルートからドバイに向かう定期便が上空を通過する時間であったが、王子と彼の部下は戦闘機と民間ジェット機の音の違いを聞きわけることができる。

王子は腕時計で時間を確かめた。いよいよ「国境の南」作戦に入る時が来たようだ。王子と部下の上官たちは足早に司令官室に向かった。

彼らがこの三日間かけてたてた「国境の南作戦」。それはイスラエル戦闘機3機の発進後少しおいて同じ空軍基地から離陸する後続の3機に対処する作戦である。後続機とは大型空中給油機とそれを護衛する戦闘機2機の合計3機の編隊。9機のサウジアラビア戦闘機がヨルダン国境とハファル・アル・バテンのほぼ中間地点でイスラエルの3機を待ち伏せ、敵機の後方に回り込む。そして給油機と護衛機の間割り込み3機を分断、味方の戦闘機がそれぞれ3機ずつで取り囲むという戦法である。

「彼らは離陸した後、先に発進してイランに向かった3機と同じ飛行ルートをたど

る。最初の3機がイランのどこに向かい何をするかは先程話した通りだ。この先発の三機は手出し無用。」

イスラエル戦闘機のミッションについてトルキ司令官は父親の国防相から聞いた内容を部下達に伝えた。

「後から飛んで来る3機のうち給油機だけサウジアラビア領空に誘導しそのままここに連れてこい。国境の南はサウド家の領地だ。領地に来た客人は丁重にテントにお迎えする。それがベドウィン流のもてなしと言うものだ。」

「敵の給油機がすんなりと誘導に従わない場合はどうしますか？」

「その時は貴様らは鷹になれ。我が領空であることを確認した上で給油機を撃墜するのだ。領空を侵犯した軍用機の撃墜は自衛権の行使として国際法上認められている。」

部下の質問に対しトルキはそう答えた。

「護衛の2機はどうしますか？」攻撃隊長の中佐が尋ねた。

「二人の従者は国にお帰りいただくのだ。2機とも給油機からできるだけ遠く引き離せ。但し撃墜する必要はない。彼らは何とかこちらを引き離し給油機の傍に戻ろうとするだろうが、しつかり取り囲んで飛び続けさせる。」

第7章 「彼らはいずれ燃料が底をつく。そこはイラクか、さもなければわが王国の領空だから」

ら砂漠に不時着する訳にもいくまい。結局Uターンして自国に戻るほかないはずだ。」

「最初に我々が見逃した3機はどうなるのでしょうか。」
誰しも薄々わかっているはずのドラマの結末を聞きたがった。

「イスラエル空軍はイラン空軍より格段に優れている。戦闘機もパイロットもただから彼らは目標を爆撃しイランの領空を無事脱出するだろう。」

「しかしその時彼らは親鳥が迎えに来られないことを知る。彼らには帰投するだけの燃料は無い。燃料が底をつき次第に弱る仔鳥たちの運命がどうなるのか。それはアラールのみがご存じであろう。インシヤッター。」

司令官の言葉に笑う者は誰もいなかった。イスラエルが自分たちの作戦の罠にはまったことに快哉を叫びたい気持だった。しかしその一方で敵とは言え彼らも自分たちと同じパイロットである。任務を遂行したにもかかわらず燃料切れで帰投できず、アラビア上空をさまよった挙句、砂漠か海に不時着することは間違いない。それを想像すると笑ってすますことなどできなかつた。パイロットとしての奇妙な同胞意識とも言うのである。

トルキ王子は椅子に座ったまま腕を組んで目を閉じた。突然目の前の電話の呼び出し音が室内に響きわたり全員に緊張感が走る。王子が受話器を取り上げると、タブーク空軍基地司令官の声が飛び込んできた。サウジアラビアの北西にあるタブーク基地

第7章

はイスラエルを監視する要衝の地にあり、最新鋭のレーダーとコンピューターを積み込んだ早期警戒機AWACSが配備されている。タブーク基地司令官が早口気味に状況を伝えてきた。

「午前7時〇〇分、イスラエル空軍給油機1機と護衛の2機がヨルダン領空を通過中。〇〇分後にわが国とイラクの国境上空に達する見込み。3機の高度〇〇フィート、速度〇〇KMH。以上。」

「了解」

「作戦の成功を祈る。」

二人の司令官の間で短いやりとりが交わされた。

受話器を握りしめながらトルキ王子は目の前の副司令官に目配せした。それに応えて副司令官が軽くうなづく。王子は受話器を置くのと立ちあがって言った。

「直ちに作戦行動に移れ。」

飛行服に身を固めた攻撃隊長以下9名のパイロットが椅子から反射的に身を起こすと王子に最敬礼し、ドアに向かって走った。彼らの背中に力強い王子の声がとぶ。

「任せたぞ！」

パイロット達は後ろ向きのまま右手を上げて部屋から駆けだして行った。

サウジアラビア空軍のF16戦闘機9機はアラビア半島付け根のほぼ中間地点で

第7章

イスラエルの給油機と護衛の2機に遭遇した。と言っても正面から対峙した訳ではなく、かなり手前から高度を下げてイスラエルの3機をやり過ぎすや直ちに反転し後方に回り込んだのである。

勿論イスラエル機のレーダーはサウジアラビア方面からこちらに向かつてくる機影を捉えている。それがレーダーの端に現れた時はまだ機種も機数も確認できなかったが、双方の距離が次第に狭まり漸く9機の編隊であることがわかった。

レーダーは9機の編隊が彼らよりはるかに低い高度を飛行していることを示している。真正面から直接攻撃してくる気配はなさそうだ。イスラエルのパイロット達は編隊が自分たちの眼下を通り過ぎるのを目にした。彼らはサウジアラビア空軍の飛行訓練だと勘違いした。

しかし上下ですれ違おうと同時に9機は急上昇に転じ、イスラエル機の高度に達するや猛烈な追撃を開始した。トップスピードにあげると9機はたちまち給油機と護衛の2機に追いついた。イスラエル側もサウジアラビア側も戦闘機は全く同じF16である。しかし一方は足の遅い給油機と一緒のため追いつくのにさほど時間はかからなかった。

レーダーは9機が刻々と猛追してくる状況を示しているが、イスラエル側にはなす

すべがない。後方からの接近のため自らの目で確認することは困難だ。戦闘機のコックピットは前方の視界に対しては上下左右ともかなり広い。しかし後方となると自らの機体に遮られほとんど視界が利かない。ましてヘルメットと酸素マスクが邪魔をしてわずかに首を真横に振ることができただけである。イスラエル機のパイロット達はただ相手の出方を見る他なかった。

9機はイスラエル機の背後に接近すると、そのうち2機が左右の護衛機の頭上に張り付き護衛機と給油機の間で強引に割り込み始めた。小鳥たちは必死になって割り込みを防ごうとしたが、ついにイスラエルの3機とサウジアラビアの2機はほぼ横一直線に並んだ。そしてサウジアラビア機は機体を小刻みに振り護衛機を給油機から遠ざけようとした。それはまるで親鳥とそれにぴたり寄り添う2匹の小鳥の親子連れを引き裂こうとするようであった。

給油機と護衛機の間隔が次第に広がるのを見て後方の7機も前方に移動し、結局イスラエルの3機それぞれをサウジアラビアの戦闘機3機ずつが左右と後方から取り囲む形となった。

羊を放牧していたبدوインの少年は西から東に向かう飛行機雲に見とれていた。最初は3本の筋であった。まもなく西の空に編隊飛行のジェット雲が現れた。先頭が第2機、その後3機、さらに最後尾4機の見事な編隊飛行である。少年にはそれがサ

第7章

ツカーの攻撃の布陣そのもののように見えた。9機は最初の3機に追いつき、合計12機の大編隊となり、次には4機ずつの3編隊に分かれた。その後、左右の2編隊はジグザグ飛行を続けながらも次第に遠ざかり、残る中央の1編隊は真っ直ぐに飛び続け砂漠の地平線に消え去った。それはまさに見事なページェントを見る思いであった。少年はあんぐりと口を開けたまま空を仰ぎ興奮気味につぶやいた。△テントに戻ったら両親や友達に話さなくっちゃ。▽

3機に取り囲まれたイスラエルの護衛機は時には速度をあげ、時には急上昇、急降下、旋回を繰り返し、敵機を振り切って給油機に合流しようとした。しかしサウジアラビア機はびったりとそして執拗に寄り添ったままである。両方の戦闘機は全く同じ米国製のF16である。飛行性能が同じであるためイスラエル機が如何にアクロバット技能を駆使しても結局サウジアラビア機を引き離すことはできない。

イスラエルのパイロットはミサイルで相手を攻撃することもできない。当たり前の話だが空対空ミサイルは真っ直ぐ前方にしか飛ばないから真横や真後ろにいる敵機は撃ち落とせない。むしろ後尾につけたサウジアラビア機ならいつでも自機を撃墜できるはずだが、攻撃する気配は見せない。サウジアラビアの3機はただ無言でイスラエル機と編隊飛行を続けるばかりであった。

イスラエル機のパイロットは言い知れぬ恐怖感と威圧感の中で次第に焦りを覚え

始めた。追尾を振り切ろうとアクロバット飛行を繰り返したおかげで燃料を予想以上に食いつぶしたようである。給油機と引き離され、砂漠の上空をあてどなく飛び続け、最早帰投のために残された燃料はぎりぎりである。ここはアラビア半島上空の敵地の真ただ中、砂漠に不時着する訳にはいかない。イスラエルの護衛機2機には基地に帰投する選択肢しか残されていなかった。

護衛の2機が踵を返すのを確認したサウジアラビア機のパイロットは基地の作戦本部に作戦終了を報告して帰途についた。

「客人の従者はお帰り願いました。」

一方、客人であるイスラエル給油機を取り囲んだサウジアラビア戦闘機は給油機のパイロットに向かって自分たちのテントに立ち寄ること、即ちハフル・アル・バテン基地に着陸するように呼びかけた。それは呼びかけたと言うより命令したと言った方がいいのかもしれない。それに対して給油機は何も答えず、機体を左右に振っては囲いから逃れようと身をよじった。しかし給油機と戦闘機では運動性能に天と地の差があり、包囲網を脱出することが不可能であることは明らかであった。3羽の鷹に囲まれたのろまなアホウドリはその進退が極まりつつあった。

第7章 次第にハフル・アル・バテン基地が近づいて来る。アホウドリはついに横を並走する鷹に体をぶつけて活路を見出そうとした。さすがの鷹もその時だけは身を横に逸ら

す他なかった。

そのようなことが何度か繰り返された後、後尾につけていた攻撃隊長が断を下した。「給油機を撃墜する。」

その声を受け並走する2機の僚機は左右に分かれて行った。隊長はミサイル発射ポタンをぐいと押した。標的は目の前にある大型機。目を閉じてでも撃墜できる確かな標的だ。次の瞬間、ミサイルは狙い違わず給油機に命中した。燃料を腹一杯に蓄えた給油機は大きな炎に包まれた。ばらばらになった機体の破片が陽光を受けきらきら光りながら落下して行く。

隊長の目に地上に東西に延びる細い一本の線が映った。トランス・アラビア・パイプライン、通称TAPラインである。今は使われていないが、かつてサウジアラビア東部の豊かな原油を地中海に運ぶパイプラインであり、サウジアラビア領内の砂漠の中をイラクとの国境に沿って延々と続いている。

隊長は給油機の破片がTAPラインに向かって落下していくのを見て、サウジアラビア領空内で撃墜したことを再確認した。

「客人は我々のテントに立ち寄るようにとの申し出を断り領空外に逃走しようとした。従って領空侵犯で撃墜した。」

第7章 隊長は基地に報告すると部下の僚機2機を引き連れ、基地に向かってゆっくり高度

第7章

を下げ始めた。